

新河岸川のあらまし（４）

新河岸川舟運と河岸場

新河岸川では、江戸時代初期から昭和初めまで、江戸・東京と川越を結んで舟運が行われていました。その始まりは、1638（寛永 15）年に川越の仙波東照宮が大火で焼失し、その再建資材を江戸から新河岸川を利用して舟で運んだことでした。翌年に川越藩主となった松平信綱は新河岸川を利用した本格的な舟運を計画し、舟の運航に適するように、元々蛇行の多かった川にさらに屈曲を付けるなどして、水量を確保したといわれています。

舟運が始まったのは 1653（慶安 4）年頃（1644～1662 年の間に諸説ある）で、まず上新河岸・下新河岸が開設され、後に各地に河岸場が増えていきました。

当時の新河岸川は、現在の朝霞・和光・戸田の 3 市が接する地点で荒川に合流していたので、そこから下流は荒川（下流は隅田川）を利用し、浅草の花川戸河岸まで至りました。（河岸場の数は数え方により多少の違いがありますが、新河岸川部分で最大 23 カ所）

最も繁栄したのが川越五河岸といわれた上・下新河岸、扇河岸、寺尾河岸、牛子河岸。当初、新河

岸川は伊佐沼から来る水が主体で、これが台地に接する場所で南に向きを変えており、その場所を上・下新河岸が設けられ、後に、より川越に近い場所として、上流に水路を掘り広げ扇河岸を開設しました。多い時には五河岸合わせて 30 軒の舟問屋があり、下新河岸の伊勢安では母屋や蔵が残っています。

一つ下流の福岡河岸では舟問屋が 3 軒あり、対岸の古市場河岸と共に繁栄しましたが、旧福田屋の屋敷建物が福岡河岸記念館として公開されています。

志木（引又）河岸では井下田回漕店など常時 2 軒が営業していましたが、河川改修で川の位置が変わったり、道路新設で店が解体されたりして、ほとんど名残はありません。

明治になってから、扇河岸の上流をさらに掘り進め仙波河岸を開設しましたが、川越に最も近いため大変繁盛しました。現在は敷地が仙波河岸史跡公園になっています。

舟は底の浅い形で、帆を上げ竿で操りましたが（荒川では櫓）、上りは「のっつけ」と呼ばれる人足が岸からロープで引っ張り上げました。

江戸へは穀類・農産物・木材など、江戸からは肥料・日用雑貨など。旅客も運び、近隣はもとより、所沢方面、奥多摩方面からも荷物が集まりました。

明治後半からは鉄道が通り始め、大正初めには東上鉄道が開通。大正から昭和にかけての改修工事の河道の直線化で水位が下がり、舟の運航が難しくなるなどがあり、1931（昭和 6）年に舟運は終了しました。（天田 眞）

